オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞

まほろばの里農学校（さとのうがっこう）

山形県（やまがたけん） 高畠町（たかはたまち）

講　評

平成2年に、農村と都市の交流と環境の調和により発足した「たかはた共生塾」が都市住民に農業・農村の理解を深めるため平成4年に開講した「まほろばの里農学校」は、毎年2回（6月と9月）に都市住民等を対象に農業・農村体験活動を行っている。現在では75人（40世帯）を超える町内移住者「新まほろば人」を生み出し、認定農業者（4名）や農家民宿を経営する者も現れるなど、交流を通じて地域の活性化に大きく寄与された点が評価された。

高柳町（たかやなぎまち）

新潟県（にいがたけん） 高柳町（たかやなぎまち）

講　評

「じょんのび」（「ゆったり、のんびり」の意）をキーワードに、かやぶきの里など受け入れ体制の整備も行いながら交流観光によるまちづくりを実現するため、地域の連携を重視した地域ぐるみの取り組みを町民と行政が一体になって取組み、その結果、平成6年13万人から平成15年24万人と交流人口が大幅に増加し、野菜直売所の開設など新たな活動が始まるなど、町の人材、自然、文化にわたる地域資源を活用する取組みが地域の活性化をもたらした点が評価された。

オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞

東村（ひがしそん）

沖縄県（おきなわけん） 東村（ひがしそん）

講評

行政と民間が一体となって地域活性化方策や地域資源の掘り起こしを行い、交流型農村の基盤づくりや体験滞在型観光の受け皿組織(エコツーリズム協会、ブルーツーリズム協会、グリーン・ツーリズム協会)が、新たな雇用の場の創出にもつながっている。早稲田大学の援農文化体験ツアーや県内外のセカンドスクールを受け入れるなど体験学習を推進。都市と農山漁村のお互いの暮らしが豊かになる取組であり、地域の活性化に貢献している点が評価された。

よこはまホタル村（むら）

青森県（あおもりけん） 横浜町（よこはままち）

講評

ゲンジボタルが生息する北限地として、また横浜町の豊かな自然環境のシンボルとして「ホタル」を中心とした活動を実施。稲作や地引網体験の受入の他、ホタル大使の公募、イメージソングのＣＤ化などユニークな活動も交え、年間を通じた各種イベントにより県内外からの集客が図られている。また東京都小金井市や神奈川県横浜市との交流も展開。本活動が町への経済効果や地域住民の生きがいづくりにつながる点や、今後の展開にも意欲的である点が評価された。

オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞

掛川市（かけがわし）

静岡県（しずおかけん） 掛川市（かけがわし）

講　評

昭和54年に全国に先駆け『生涯学習都市』を宣言し、市民一人ひとりが一生涯学びつづけていこうと生涯学習まちづくりを展開。そして、将来都市像・市民像を実現するため、「健康福祉、教育文化、環境資源、経済観光、建設防災、広域交流」という６分野をイニシャルKで「６K政策」として体系化し諸事業を柱に、都市と農村の共生対流を全面展開している。特に市民の力で新幹線の駅をつくり、地域において交流につなげた点を評価された。

特定非営利活動法人（とくていひえいりかつどうほうじん） グラウンドワーク東海（とうかい）

愛知県（あいちけん） 名古屋市（なごやし）

講　評

個人、団体、企業、行政と幅広い会員で構成され、住民・企業・行政のパートナーシップによる身近な環境活動の普及啓発活動や、岐阜、愛知、三重の東海３県で環境改善活動を実施する団体の支援を行っている。都市側と農山漁村側両方の会員に自然環境に関する呼びかけを行う事により、相互理解が生まれ往来者を増やすなどの実績により、グラウンドワーク活動の普及と実践活動は今後大いに期待できる活動として評価された。

オーライ！ニッポン大賞 審査委員会長賞

新宿区立市谷小学校PTA

しんじゅくくりついちがやしょうがっこう

東京都 新宿区

講　評

新宿区市谷小学校の教員が食文化の研究の一環で岩手県花泉町の「餅文化」に興味を持ち花泉町立金沢小学校を訪問したのをきっかけに、子供達に自然のすばらしさ、人の心の温かさに触れる事で豊かな人間を育てようと、両校の4、5年生児童及びＰＴＡ、教職員が春と夏の年2回お互いに東京と花泉町を行き来し、いろいろな体験やホームステイを通じ交流を深めている。受入地域や保護者・学校が一体となり継続的な交流活動として定着し、今年で17年目を迎え、その継続性の面からも評価された。

西米良村

にしめらそん

宮崎県 西米良村

講　評

基本コンセプトを「九州中央山地一ツ瀬川源流・生涯現役元気村【カリコボーズの休暇村・米良の庄】」と設定し、村民が健康で長生きし、生涯現役元気むらづくりを目指し、これを具体的に推進する戦略プロジェクトとして「8つの庄づくり」（町づくり、健康づくり、湖遊び、語り部、花づくり、川遊び、匠、交流滞在）を行っている。また全国的に有名な「西米良型ワーキングホリデイ制度」と結びつける事により、更なる相乗効果で都市農村交流の展開が図られている点が評価された。

ライフスタイル賞　講評

ライフスタイル賞は、Ｉターン等により農山漁村において個性的で魅力的な新しいライフスタイルを実践している方について、広くその生き方を紹介し、今後農山漁村に住んでみたい、行ってみたいと思う方々への参考としてもらうことを目的としています。

審査委員会では、4つの審査基準（＊）をもとに、各委員の視点から様々な角度で審議を行いましたが、特に「地域に密着して活動していること」、「地域に刺激を与え波及効果を生んでいること」、「外部へのアピール力があり、やってみたいと思う人たちの参考になるようなこと」、「みんなが憧れる生き方を創造していること」などという点に着目しライフスタイル賞を選定しました。

受賞者の選定に際しては各々のライフスタイルの独自性を評価するのに大変苦労しましたが、6件の方々について地域に根ざして活性化に貢献している点が評価され、今年度のライフスタイル賞に選ばれました。

このような方々の取り組みを参考として、今後、各地域において新たなライフスタイルが一層普及されることを期待するものであります。

（＊）ライフスタイル賞　審査基準

ア　農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルを実践していること。

イ　個性的で魅力のある活動であること。

ウ　新たなライフスタイルの実践に継続性があること。

エ　新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること。

ライフスタイル賞

徳永　巧（とくなが　たくみ）

岡山県 久世町（居住年数25年）

講　評

大学卒業後、生まれ故郷に帰郷。その後自由な生活がしたいと、努めていた役場を退職し、専門技術である環境技術系のコンサルタントを開業。仕事を通じて野生生物保護やビオトープ再生、茅葺き家屋や歴史遺産の保存等英国のグラウンドワークトラストを参考に、地域のリーダーに呼びかけ「真庭遺産研究会」を立ち上げ、自然や歴史資源、古民家等を活用した農村観光やグリーン・ツーリズムを推進している。

また、農業法人を設立したり、田舎の因習や閉鎖的な考えを打破すべく、「自然と共生」をテーマに都市農村交流や他地域農村との交流を推進している点が評価された。

ライフスタイル賞

赤間（あかま）　真理子（まりこ）

福島県（ふくしまけん） 保原町（ほばらまち）（居住年数14年）

講　評

平成元年、美しい自然に魅せられて東京から家族全員で移り住み、編集プロダクション㈱草原社の創業者として編集業務に携わる一方、平成16年１月にかつて地元の特産だった桑製品の専門店を開店。

移住後、毎年、都市住民を対象に「くだものの里ツアー」や都会のアーチストを地元に呼び「ふれあいコンサート」等を展開、地域においても編集のキャリアを活かし地元広報誌やイベントちらしの作成等のアドバイザー活動するなど、地域に溶け込み田舎と都市を結ぶ架け橋となる活動を実施している点が評価された。

ライフスタイル賞

野村　良子（のむら　りょうこ）

秋田県 能代市（あきたけん　のしろし）（居住年数27年）

講　評

結婚を期に当地に移り住み、農業に従事する傍ら、築５０年の古民家を改修し農家レストラン・民宿を開業し、ここを拠点に特産品「桧山そば」や農作業体験等を提供している。また能代市桧山地区の自然や文化を活用したグリーン･ツーリズム活動を実践するため、市民７人で「桧山グリーン・ツーリズム推進協議会」を設立し、会長に就任するなど、地域ぐるみのグリーン・ツーリズム活動に積極的に取組み実践している点が評価された。